

イベリア半島における傍層言語理論の検証

—— 基層言語・上層言語との関連において ——

石 原 忠 佳

はじめに

イベリア半島に位置するスペインは、ポルトガル、フランスと国境を接するが、これらの国と比べて、極めて独特な言語事情を有している。この独自性は、15世紀までこの地域を支配したアラブ人の言語に負うところが大である。このような理由から、イベリア半島は社会言語学の観点からは傍層言語 (adstratum) 理論——二つ以上の言語が混在する地域の二重言語併用 (bilingualism) 等の研究——、の検証にもってこいの素材を提供し、また歴史言語学の立場からは、基層言語 (substratum) 理論¹⁾や上層言語 (superstratum) 理論²⁾の論拠に格好の地であるといえよう。近年のプラグマティクス (Pragmatics) が、従来のあらゆる言語理論の支流を総括して誕生した、新しい方向性を探る学問であることを鑑みるに³⁾、イベリア半島は、言語学上の宝庫として、今後ますます多くの研究者の注目を浴びることになるだろう。

今日ではコミュニケーションの発達によって、〈傍層〉の概念は必らずしも、地理上の隣接を含意するわけではなく、極めて遠方の地域の政治的、経済的な近接関係をも示唆している。しかしながら、「イベリア半島」、この地続きの国境地帯に住む人々は、確かに言語的にも共通のものを培ってきたのである。《人間の住むところにはコミュニケーションがあり、人々はそれを目指して言語を使用する》、本小論はこのような視点から、イベリア半島の諸言語を、社会言語学的に考察するのがその目的である。

1 基層言語理論のおこり

基層理論に関するあらゆる仮説は、その検証が極めて困難である。というのは、まず第一に、基層はもはや観察されることのない類のものであり、基層言語が当時いかなる発音形態を有していたかを明示する、確かな手段に欠けるからである。いずれにせよ、基層理論は、イタリアのロマンス語学者 G. I. Ascoli⁴⁾ によって19世紀末に公にされ、発表以来広く取りあげられ、また同時に多くの議論をよんだ。特に、イスパニア世界に関しては、南米のスペイン語が呈する数々の特質の説明が、この基層理論に基づいてなされたようである。ドイツ人の学者 R. Lenz はスペイン語を独学で習得し、南米のチリに赴いた。それまでスペイン人と接触する機会にめぐまれなかった Lenz は、チリで話されているスペイン語が、彼が習得したものとは異なる事実に着眼し、当時取りざたされていた基層理論に基づき、チリのスペイン語——後に、チリ南部のスペイン語と訂正——、の特異性をアラウカ語 (Araucan⁵⁾) の基層と結びつけた。Lenz は、チリ南部のスペイン語の特徴として以下の点を指摘した。

- ①本来のスペイン語の5つの母音 /a/, /e/, /i/, /o/, /u/ に加え、長母音かつ開母音の /ɐ:/ が存在する。
- ② /tr/ 及び語頭 /f-/ の無声硬口蓋破擦音 [tʃ] 化⁶⁾
- ③チリのスペイン語には無声両唇摩擦音 [ɸ] が存在し、これは [b] とともに異なる音である⁷⁾。

しかしながら今日では、この地域の周辺の実住民の言語がスペイン語に及ぼす、数々の面での影響が指摘されている。特に二重言語併用地域できわだった影響力がみられ、もはや議論の焦点は、基層 (substratum) から傍層 (adstratum) へ移行しつつある。

さらに基層理論の論拠を弱体化させるものとして、社会言語学的 (socio-linguistic) 要因をあげることができる。それは、この地域における〈他言語の誤った習得〉という問題点である。例えば、他の言語が共存する地域において、第一世代は必らずといってよいほど、その言語を誤った形で習得し、その形態を使い続ける。第二世代以降になって、はじめてこの問題が解消され、

真の意味での二重言語併用者となる訳である⁸⁾。

ところで、基層言語の問題にさらに深くアプローチできる地域は、中米ではメキシコのユカタン半島、また南米ではパラグアイであると、筆者は考えている⁹⁾。しかしながら、「イベリア半島の言語事情」という今回のテーマから大きくかけ離れてしまう感がある故、中南米の言語事情の詳細については割愛し、イベリア半島の状況に再び眼をむけることにする。

2 イベリア半島の言語的概観

今日のイベリア半島では、スペイン語、ポルトガル語、カタルニア語、バスク語が話されている。そのうちスペイン語に関してみるなら、カスティーリャ方言 (Castellano) が最も優勢であるといえよう。Castellano はもともと、カンタブリア (Cantabria) にはじまってブルゴス (Burgos) 周辺の小さな地域で話されていたカスティーリャ (Castilla) 地方の一方言にすぎなかったが、西方のレオン方言 (Leonés) の地域と、東方のアラゴン方言 (Navarro-aragonés) を押しのける形で、次第に南下して拡大していった。Castellano が生まれたカンタブリア地方から、イベリア半島中央部までは旧カスティーリャ (Castilla la vieja) とよばれ、最も初期的な Castellano の形態を、今日でも比較的忠実に保持しているといわれている。Castellano は南下にともない、次第に音声的変遷をとげていったのであるが、マドリード (Madrid) やマンチャ地方 (la Mancha) のものは、その形態がそれほど変化してはおらず Castellano の原型を留めているといえよう。しかしながら、その後さらに南下して使用地域を拡大していった Castellano は、カンタブリア地方のものとかかなり形を変えてしまった。南西に広がった Castellano はエストレマドゥラ方言 (Extremeño), また南東へ延びたものはムルシア方言 (Murciano), さらにスペイン最南部のアンドルシア地方にまで至ったものはアンドルシア方言 (Andaluz) と、それぞれが新たな名称で呼ばれることになった。これらの方言は、もはや Castellano の方言——細分化方言 (subdialectos) ——として区別されている。さらにイベリア半島を離れ、Castellano は大西洋上のカナリア諸島にまで至っている。こちらはカナリア方言 (Canario) と呼ばれ、やはり Castellano の細分化方言の一つである

とみなされている。

さて今回のテーマは、いわゆる二重言語併用地帯といわれるポルトガル北部のガリシア地方、バルセロナ (Barcelona) 周辺のカタルニア地方、そしてビルバオ (Bilbao), サンセバスティアン (Sansebastián) を中心としたバスク地方におけるスペイン語がどのような特徴を示すかを考察することにある。それにはまず、“bilingualism” なる用語に対して、“sesquilingualism” —— *sesqui* は *one and a half* をあらわすラテン語——, なる用語の意味を明確に把握しなければならない。“bilingualism” が二ヶ国語を自由に駆使できる能力に言及するのに対し、“sesquilingualism” とは、一ヶ国語は理解したり話したりできるが、他の一つは理解できるが話せないという状態をいうのである (receptive-bilingual, productive-monolingual)。さらに“sesquidialectalism” なる用語もあり、二つの方言のうち、一つは話したり理解したりできるが、もう一つは理解のみできるといった立場の人がこれに相当する訳である。カスティーリャ地方の人がアンダルシア方言を理解するのは容易であるが、そのアクセントをまねて話すことは極めてむずかしいというのがそのよい例であろう。

事実、多言語が複雑に入り組むイベリア半島にあっては、“bilingualism” という厳密かつ狭義な視点——方言というサブカテゴリー (subcategory) を度外視した——のみからでは、その言語事情を正しくとらえることが困難である。ここに、“sesquilingualism”, “sesquidialectalism” という二つの概念を念頭においた地理言語学的アプローチが、いかに整合的であるかが認識できよう。

さらに二重言語併用地域を考察するにあたり、冒頭にも述べたように、〈傍層〉を取り上げるのみではなく〈基層〉からの検証が、このイベリア半島ではとりわけ重要視される。〈基層〉とは言い換えれば、征服言語と被征服言語の関係も示唆し、一つの言語が他の言語にとって代わられる時、以前の言語が新しい言語に残す一連の言語現象でもある。土着の言語の音韻やアクセントなどが、とって代わった言語に少なからず影響を及ぼしている状態、例えば、ラテン語で /f-/ で始まる語が古代スペイン語では [h] の帯気音 (aspirated) に移行し、後に消失する現象に関して言えば、これはもともとブルゴスやリオハ (Rioja) で起こったものであり、本来 [f] の発音をもたないバスク語が、ローマ化

(Romanization) の遅れたカンタブリア地方に及ぼした重要な基層であると言える。

(ラテン語)

FILIU > hijo (カスティーリャ方言)

FILIU > hilh [hi ʎ] (バスク語)

FILIU > fillo / filho (ガリシア方言)

FILIU > fillo / fiyo (レオン方言)

FILIU > fillo (アラゴン方言)

FILIU > fill (カタルニア語)

FARINA > farina (レオン方言), (アラゴン方言), (カタルニア語)

FARINA > harina (カスティーリャ方言)

他方、〈傍層〉とは、二つの話し言葉が隣接している地域で、言語現象に相互の影響がある場合であるから、イベリア半島においてはスペイン語とポルトガル語の関係、あるいはスペイン語とカタルニア語の関係がとり上げられて然るべき感がある。しかしながら現状は、そのように単純な問題に一件落着するものではない。それでは、どのような出発点に立って、この地域の検証をはじめなければならないのであろうか。以下、具体的な事例に沿って論を進めることにする。

3 スペイン語とポルトガル語の関係

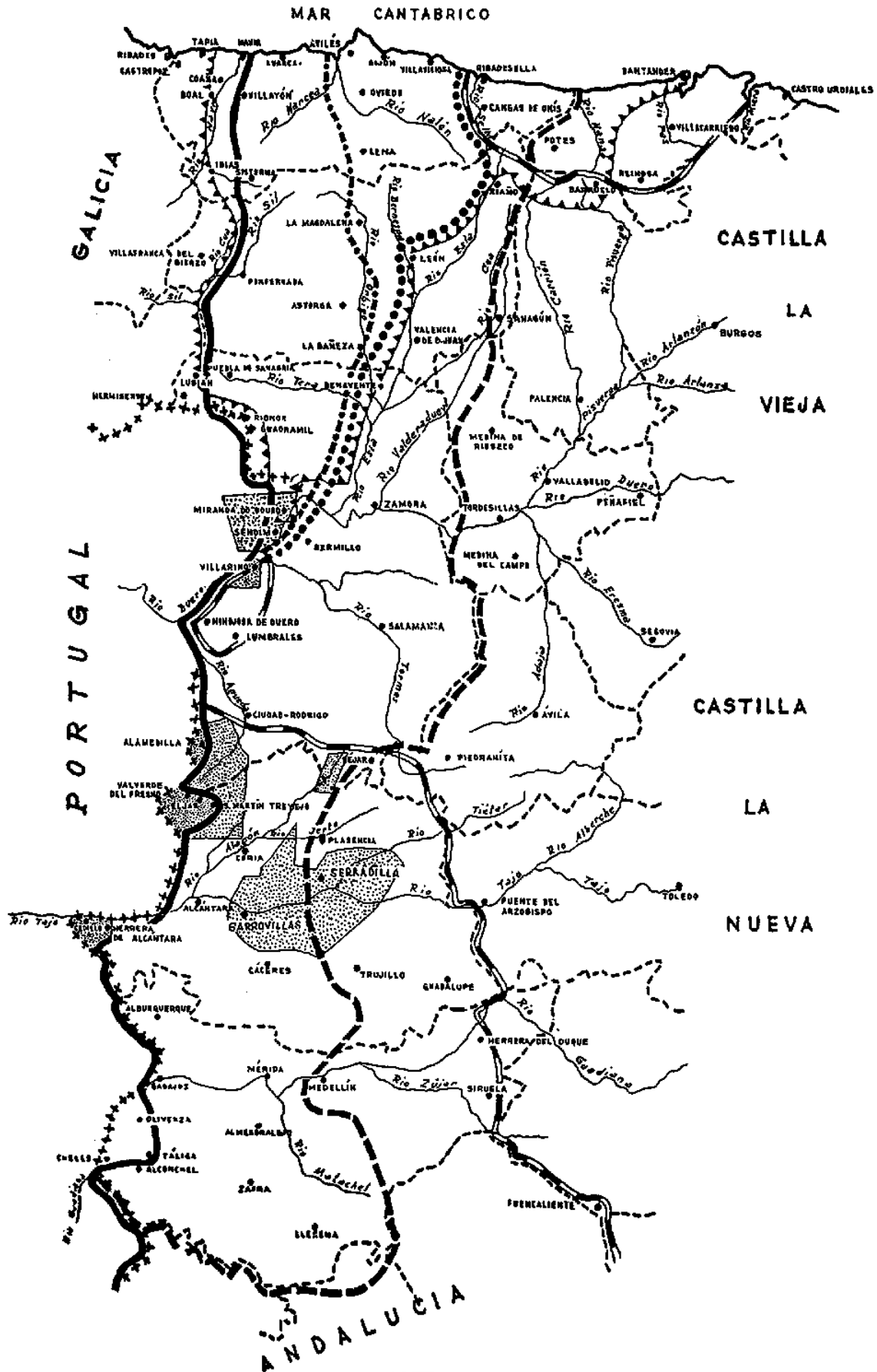
イベリア半島におけるスペイン語とポルトガル語の分布状況は、その国境に必ずしも一致していない。特に、ポルトガル北部のスペインのガリシア (Galicia) 地方では、その言語事情は複雑である。というのは、この地域ではポルトガル語とその方言にあたるガリシア方言 (gallego) が共存しているからである。それ故 Gallego は、厳密にはスペイン語で「ガリシア・ポルトガル語」(gallego-portugués) と呼ばれるのである。さらにこの地域には、スペイン語の

方言であるレオン方言 (leonés) が介入しており、その言語事情はいっそう複雑なものとなっている。いわばガリシア地方は一種の二重言語併用地域——多方言混在地帯——であり、政治言語学 (Political-linguistics) の観点からすれば、「もしガリシア地方が、政治的にカスティーリャ王国に併合されていなかったならば、現在ではこの地域でポルトガル語が話されていたであろう」という推論も整合性を帯びてくる¹⁰⁾。ガリシア方言は言語学的にみれば、ポルトガル語の初期の方言がスペイン語化されたものとされている。このように、当時の政治勢力の大小が、言語の上にも反映されている事実は、今後政治言語学的研究の上で恰好の題材となり得よう。

さて、ポルトガルとスペインを隔てる縦の国境線は、レオン (León) 県、サモラ (Zamora) 県、サラマンカ (Salamanca) 県、カセレス (Cáceres) 県、バダホス (Badajoz) 県、ウエルバ (Huelva) 県に沿っている。レオン県においては、ガリシアの様々な影響があるものの、言語学上はそれほど複雑な問題は抱えていない。しかしながら、サモラ県西部では、レオン方言がポルトガル国境内に介入して話されているのが現状である。Rionor, Guadramil, そして Miranda de Duero といった地点がその例である。

さらに南下すると、今度はポルトガル語がスペイン国境内の飛び地 (enclave) で話されている。具体的には、サラマンカ県の南西部カセレスとの県境の Alamedilla¹¹⁾ で話されているポルトガル語である。また、カセレス県内において、その北西部の Valverde de Fresno, Eljas, San Martín de Trevejo の3ヶ所にもポルトガル語が介入している。また同じカセレス県内部の Cedillo と Herrera de Alcántara でもポルトガル語が使用されている。

バダホス県に至っては、ポルトガル語とスペイン語の二重言語併用がみられる地域がある。Olivenza の地方裁判所の管轄区に属する Cheles と Táliga がそうである。この地域は16世紀以前は、状況によってある時はポルトガル地方裁判所の管轄区に属し、またある時はスペイン地方裁判所管轄区に属したりしたが、16世紀末には恒久的にスペインに組み込まれるといったような政治行政上の要因がからんでいる。この地域では、ポルトガル語は商業用語として、またスペイン語は教育に使われる言葉として、それぞれ使い分けられているのが



地図1

現状である。

3. 1 基底等語線 (Base Isogloss)

国境地帯の言語状況は、方法論的には等語線 (isoglosses) という手段を用いて整理することができる。等語線とは様々な言語現象を、音声面、形態面、統語面からの特徴に基づき、具体的に分割する理論上の線であり、その基本となる等語線は基底等語線 (base isogloss) と呼ばれている。そして一つ以上の等語線が基底等語線と一致したときには、ここに等語線の束 (bundle of isoglosses) が設定され、言語的境界が示されたことになる。

事実、レオン方言とガリシア方言の間にも幾つかの基底等語線が存在しているが、その一つに二重母音 (diphthong) があげられる。いわゆるスペイン語で語根母音変化とよばれる現象は、ラテン語の短母音 /*ɔ̄*/, /*ɛ̄*/ に由来するものであるが (*ɔ̄* > *ue* あるいは *ɛ̄* > *ie*)、この二重母音化 (diphthongization) がレオン方言には観察されるが、ガリシア方言にはみられない。例えば、スペイン語の *fiesta* / *tierra* が *festa* / *terra* となるのは、ガリシア方言がもたらす影響であるといえる。さらにもう一つの基底等語線は、語頭の有声歯茎側音 /*l̪*-/ の硬口蓋化 (palatalization) がレオン方言では観察でき、ガリシア方言では観察できないことである。したがって、*lobo* を [ˈl̪ubu] と発音するのはレオン方言の特徴である。三番目の基底等語線として、母音間 (intervocalic) の /-*l̪*-/ や /-*n̪*-/ の消失をあげることができる。ガリシア方言やポルトガル語にみられる *sala* > *sá* *llano* > *llaõ* *salida* > *saída* がこのよい例である。

ところで、ガリシア地方北部では、ガリシア方言はアストゥリアス地方やレオン地方にも介入している。アストゥリアス地方では Río Navia の盆地に入っていて、この地点がガリシア方言とアストゥリアス方言 (Asturiano¹²⁾) の事実上の境界であるといわれている。いっぽう、レオン県におけるレオン方言とガリシア方言の境は Cua 川と Sil 川が交差する地点とされている¹³⁾。さらにサモラ県では、Puebla de Sanabria 西部の Lubián, Padornelo, Porto, そして Hermesinde でもガリシア方言が話されているが、もうこの地域まで南下すると、ポルトガル語の多大なる影響をまぬがれない。

3. 2 社会言語学的側面からの考察

ところで、以上のような地理的な立て分けが、きわめて相対的なものであることは言うまでもない。というのは、我々の検証は、スペイン語とポルトガル語といったような二つの確固とした言語に焦点をあてたものではなく、ガリシア方言とレオン方言といういわばロマンス語系の二つの下位範疇 (subcategory) を扱ったものだからである。とはいえ、二重言語併用地域であるガリシアは、社会言語学的立場からは、大変興味深い側面を呈している。ガリシアでは都市部で *castellano* が優勢であるのに対し、農村部では *gallego* が好んで使用されている。このような現状から、*gallego* は文化水準の低い人々の言語とみなされがちである。では、どうしてこのような考え方が一般化したのであろうか。

Gallego のスペイン語化¹⁴⁾は15世紀にはじまった現象で、この頃にはもう既に *gallego* は文学上の言語 (literary language) としての地位を失いつつあり、*castellano* がこれにとって代わった。とは言うものの、いっぽうでは *gallego* と *castellano* は常に相互に影響を及ぼして発展してきたのであり、多くの *castellano* の語彙が *gallego* に導入され、反対にガリシア地方の *castellano* が *gallego* 化したのも事実である。ところで、19世紀に至るまで、ガリシア方言の使用が広く農村部にいきわたっていたのは、カスティーリャ王国が自身の言語である *castellano* の使用をガリシアの住民に強要しなかったからではない。それは、ガリシア地方は19世紀まで教育制度が完備されておらず、*castellano* が拡大していく土壌が充分ではなかったという単純な社会的要因によるものである。学校がなければ、カスティーリャ王国としても、どのように *castellano* を普及してよいのかといった問題に直面していた訳である。また、たとえ征服者が被征服者に自分の言語の使用を強要したとしても、コミュニケーションという観点からは、人々は各自が最も使いやすい言語を用いるであろうことは言うまでもない。事実、ポルトガル中央政府によるガリシア地方の学校制度充実、19世紀まで手つかずの状態であった。

では、この地方のカスティーリャ化はどのように進行していったのであろうか。我々はここで、「移民の問題」に視点を向けなければならない。当時、経

済上の理由から中南米、特にアルゼンチンのブエノス・アイレス (Buenos Aires), キューバのハバナ (Havana), メキシコへの移民を企てるガリシアの住民は多く、一定の期間を経てガリシアへ再び戻ってきた人々は、中南米のスペイン語を持ち帰る結果となった。社会的下層階級に多かった移民者たちは、もちろんガリシア方言しか話すことのできない人々であったが、現地での労働のためにはスペイン語をいやがおうでも使いこなす必要性に迫られていた。多数にのぼったこれらの移民労働者はガリシアの辺境に戻り、彼らを通して農村部にスペイン語が普及したのである。こういった過程の整合性を裏づける説明は、次の2点に集約されよう。

a) 南米で用いられるスペイン語の語彙が、ガリシアでふんだんに使われている点

b) 南米を特徴づける “voseo¹⁵⁾” がスペイン本土で用いられている唯一の地域がガリシアであること。

19世紀初頭までのガリシアでは、gallego が農村部で話され、その他の地域では castellano が優勢であった。しかしながらこの状況は、ロマンチズム (Romanticism) の到来で急変を遂げることになる。それは、文芸、思想、哲学などの分野において、懐古主義に反対し、旧来の束縛を脱し、熱烈な感情の解放を主張する風潮が高まるのにもとない、言語の面においても、従来の土地の言葉や昔からの言葉へのこだわりへとつながっていった流れに象徴されよう。ガリシア出身の女流作家、ロサリア・デ・カストロ (Rosalía de Castro) が、作品の一部に土地の gallego を用いたことは、スペイン文学史上画期的な出来事である¹⁶⁾。

3. 3 ガリシア方言の細分化とガリシア文学

gallegoが話される地域は、その言語的特徴を根拠に西部地域と東部地域の二つに分類することができる。西部地域の gallego の特徴は “seseo” ——無声歯間摩擦音 [θ] を無声舌尖歯茎摩擦音 [s] で発音¹⁷⁾——と “geada” ——有声軟口蓋破裂音 [g] を有声軟口蓋摩擦音 [ɣ] で発音——である。これに対し、東部地域は castellano の影響が強く、seseo も geada も観察され

ない一帯である。

ガリシア文学の形成とともに多くの著者たちが意図したのは、その作品をできるだけ *castellano* 的用法からかけ離れたものにすることであった。例えば、従来のガリシア方言的特徴を前面に押し出すような語彙を、文学上ふんだんに使用することなどで、この試みがなされたりした。本来のガリシア方言の語彙をできるだけ多用し、ガリシア方言的でない用法は、理論上可能な言語学上の様々な法則を駆使して、ガリシア方言的な形に近づけるといった、ある意味では不自然な感をまぬがれない技法に委ねることもあった。

llanura > *chaura*

catedráticos > *caderaigos*

ガリシア方言の〈エスペラント化〉ともいえるこの人工的技巧は、結果として、ポルトガル語からも *castellano* からもかけ離れた奇妙な語彙を生みだし¹⁸⁾、その果ては一般のガリシア人には理解できないような語彙が、あちこちに溢れる状況をつくりだしてしまった。

3. 4 ガリシア地方で話されているスペイン語の特徴

ガリシアのカスティーリャ化の起源は中世にさかのぼることができ、この時期に、文学上ガリシア方言が、そのままの形で使われることがなくなったことは既に3.2で述べた。この頃は言語上は、ポルトガル語とガリシア方言の絆が消失した歴史段階であるといえる。ガリシアはカスティーリャ王国に併合され、ポルトガルとの政治的接触は薄らいでいった。当然の結果として、*castellano* が都市部で勢力を伸ばし、ガリシア方言は限られた農村部における古語 (*archaic language*¹⁹⁾)、あるいは「カスティーリャ方言化されたガリシア方言」として生き続けることになった。

このような状況から、ガリシア地方で話されているスペイン語には一連の特徴がみられ、それは語彙面・音声面・形態・統語面など様々な側面に及んでいる。ガリシア地方で話されているスペイン語の方言は、それ自体 “*castropo*” という独自の名称をもっていて、ガリシア方言を話すことと “*castropo*” を話すことは区別されて考えられている²⁰⁾。この状況は同時に、*castellano* が

“koiné²¹⁾”として、いかに容易に社会生活に浸透していったかを物語っていると言えよう。

それでは、“castropo”の特徴を、様々な角度から検証することにしよう。

①音声面

- a) イントネーションがガリシア方言に類似している。
- b) アクセントのない母音／e／及び／o／はそれぞれ／i／及び／u／へ閉母音化する：vistido<vestido, tubillo<tobillo²²⁾
- c) 連続子音／-kt-／の同化 (assimilation) : retor<rector, atitud<actitud, dotor<doctor
- d) geadáと seseo

②形態面

- a) 縮小辞として接尾辞／-iño／が用いられる。
- b) 一連の名詞の性が転換している：

el sal, el lumbre, la coraje, la vinagre
- c) 比較級の特別な形態：

más mejor, más mayor, más peor,
- d) voseoの使用

③時制及び統語面

- a) 完了過去形にはすべて点過去を用いる：

vine=he venido
- b) 大過去にも接続法過去／-ra／形の単純形態を用いる：

viniera=había venido : ya marchara cuando llegué²³⁾
- c) 未来形におけるsaliré (<saldré), sabiré (<sabré) の保持
- d) “tener” が完了形において “haber” にとって代わる：

Tengo visto a tu padre=He visto a tu padre.
- e) castellano では本来義務をあらわす “haber + de” が “estar a punto de” の意に転じて用いられる〔特に haber が単純過去形するとき〕：

hube de decirlo=estuve a punto de decirlo.
- f) “dar” + 過去分詞の独特な意味〔特に否定文において〕：

no doy terminado el libro=no soy capaz de terminar el libro

g) 利害の与格 (detivo de interés) を文体上の与格 (detivo estilístico) として用いる:

Te tengo visto a tu padre²⁴⁾

h) 副詞における性数一致:

Tu tía está media-locas=Tu tía está medio-locas

④意味面

“quitar” と “sacar” の意味の反転:

Se quita la entrada, =Se saca la entrada.

Voy a quitar la entrada=Voy a sacar la entrada.

4 スペイン語とカタルニア語の関係

スペイン語とカタルニア語の境界は、いわばスペイン語のアラゴン方言 (aragonés) とカタルニア語 (catalán) の境界線と考えるのが的を得た視点である。現在の言語分布を厳密に考慮するのであれば、アラゴン方言は、ピレネー山脈の非常に限られた地域で話されている一つの方言ということになるが、ウエスカ (Huesca) からムルシア (Murcia) に至るまでのカスティーリャ化が14世紀であったことからみれば、当然アラゴン方言とカタルニア語の関係を調べる事が重要視されるからである。

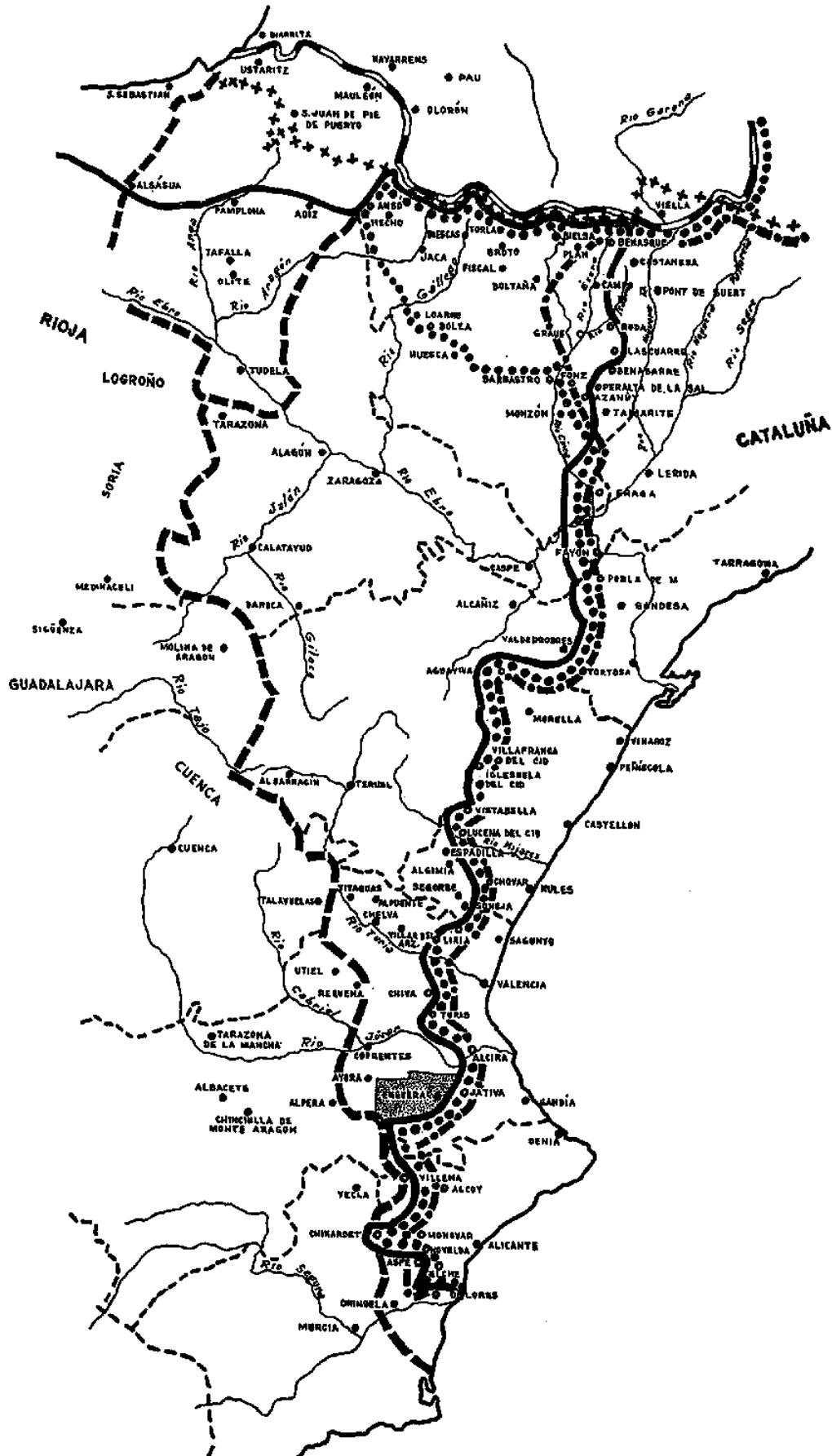
ピレネー地方におけるカタルニア語とアラゴン方言の境界線は非常に漠然としたものである。というのは、この一帯では事実上この二つが入り乱れて話されているからである。これに対し、ベナバレ (Benabarre) からアリカンテ (Alicante) に至る地域では、その境界が明瞭であり、カタルニア語を話す地域とアラゴン方言を話す地域は、一目瞭然に区別できる。これは、Benabarreから南部の地域へ、国土回復運動 (reconquista) の進む過程が、この両者の境界線を次第に確定していったというスペイン史の事実に基づいている。ポルトガルとスペインの国境が明確であるように、つまり、レコンキスタが当時、アラゴンとカタルニアへ進展する過程において、両国王がその政治的勢力分布を、条約によって細密に定めていったということである。アラゴンとカタルニアの

間の“Almizra”と呼ばれる政治条約により、バレンシア (Valencia) は、カタルニア人によって海岸線一帯が、いっぽう内部地域はアラゴンの人々によって治められることになった。こうして、バレンシアの海岸線からカステリョン (Castellón) に至る地域は、タラゴナ教区 (diócesis de Tarragona), またバレンシア内陸部はトレド教区 (diócesis de Toledo) に組み入れられた。このような状況下、カタルニア語はカタルニアの4県を含み、ピレネー山脈一帯にまで広がっていき、Huesca やサラゴサ (Zaragoza) でも、およそ7万人が今日でもカタルニア語を話している。しかしながら、この両地域のカタルニア語は、カタルニア語とアラゴン方言が混成したような言語的特徴を示している。いっぽう、ピレネー地方の言語状況に関する研究は、多くの言語学者の関心の的となり、1914年、A. Grieria はその境界線を明瞭に表示すべく論文を発表した。しかしながら彼の報告の最大の欠陥は、アラゴン方言を考慮にいれず、castellano とカタルニア語の比較という点から強引に論を進めた点であると、後にメネンデス・ピダル (Ramón Menéndez Pidal) は指摘している²⁵⁾。

また北部の Alta Ribagorza 一帯における言語状況を研究したのがドイツ人 G. Haensoh である。彼によると、この地域ではいくつかの言語現象が複雑に交差しているが、方言という観点からは大まかに3つの地域に分類される。それぞれの境は3つの川の境界に一致しているとのことであり、一つは Ésera 川、もう一つは Isábena 川、そして最後に Noguera Ribagorza 川である。Baurri や Renané など Esera 溪谷一帯の町では、アラゴン方言が、また Paules や Espés といった Isábena 川盆地流域の町では、カタルニア語とアラゴン方言の中間的性格をもつ方言が、そして、Bonausa, Aldanuz, Noales などの Noguera Ribagorza 谷の近郊では典型的なカタルニア語が話されていると報告されている。

4. 1 基底等語線

さてこの地域を整理するための基底等語線は、短母音²⁶⁾の二重母音化がおこるかおこらないかという立て分けである。アラゴン方言では二重母音化がみられ、カタルニア語ではこの現象がおこらない。しかし問題は、このアラゴン方



言における二重母音化が、常に二つの母音にみられるとは限らない点にある。時には／ô／のみに、時には／é／のみにといった状況である。そこで、この等語線を補なう意味で、補助等語線 (complementary isogloss) として、語頭の／l-／の口蓋化の有無をみることになる。カタルニア語において口蓋化がみられるのに対し、アラゴン方言ではそのままであるから、それぞれの地域がより明白に分類できるといった具合である²⁷⁾。

以上の地域までは、カタルニア語とアラゴン方言の境界がいまひとつはっきりしなかったが、さらに南下した地域では、しだいに明確な境界線が示されていく。サラゴサとウエスカにおけるカタルニア語の介入については章の冒頭で述べたが²⁸⁾、テルエル (Teruel) 県北東部の Aguaviva de Aragón の飛び地でもカタルニア語が話されている²⁹⁾。さらにカタルニア語はカステリョン (Castellón³⁰⁾)、バレーアレス諸島 (Balears)、フランスの Rosellon、またセルデーニャ (Cerdeña) の Alguer にも介入している。

バレンシアで話されているカタルニア語は “Valenciano” と呼ばれ、カタルニア語の細分化方言 (subdialect) とみなされているが、両者の差異は、アンダルシア方言 (andaluz) と castellano の違いほどの些細なものである。バレンシア県全体では、住民の半だけがカタルニア語を話し、海岸地方や首都周辺がその地域に相当する。したがって人口の多い内陸部は、南部アラゴン方言を話す住民によって占められている³¹⁾。ところで、バレンシア南部の Canales de Navarres では、言語学的にきわめて興味深い状況に遭遇する。この地帯の飛び地では、なんと16世紀の castellano がそのままの形で現在でも話されているのである³²⁾。

アリカンテ (Alicante) 県へ南下すると、Villena など castellano を話している所と、Alcoy などカタルニア語を話している所がある。それは、当時アラゴンの住民とカタルニアの住民が、政治上の緩衝地帯としてこの一帯に明確な境界を定めなかったことから、今日でも二つの言語の区分が漠然としたものになっている訳である。

4. 2 カタルニア語の発展：その社会言語学的側面

スペイン国内でカタルニア語が、今日に至るまで根強く保持されている理由は、いかなるものであろうか。一つにはスペイン文学史上の要因、例えばボスカン (Boscán³³) などのルネッサンス期の文学者が、カタルニア語で大いに著作活動を行ってきたことをあげることができる。当時の文学者たちは、まず初めは *castellano* で創作を手がけるのであるが、カタルニア語の使用も決して放棄しなかった。このように、いわゆる当時のインテリ上流階級がカタルニア語を用いていたこと、すなわちブルジョワ階級の間のカタルニア語の普及が、この言語の継続性を支えていたと言えよう。*castellano* の浸透後もカタルニア語は並行して用いられ、この地域に典型的な二重言語併用 (bilingualism) が生まれることになる。とりわけ19世紀以降、各地でナショナリズムの高揚にともない、独自の文化、習慣への再認識が広く掲げられるようになった。この時、いち早くこの気運をとり入れたのがカタルニアであり、ガリシアやバスク地方が *castellano* の使用に熱心であったのに対し、カタルニアでは、あくまで土地の言葉 (vernacular language) であるカタルニア語に固執するといった状況が生まれていた。また従来 *castellano* を使用していたプロレタリアートたちも、自からカタルニア語を学ぶようになったことも、バイリンガリズムを助長する要因であった。カタルニア地方の言語事情を、バルセローナ都市部を例にとってみるなら、ほとんどの住民が二重言語併用、またそれについて *castellano* のみを話す人々、そして最も少数の集団がカタルニア語のみを話す人々である。

この地域の二重言語併用という状況下、カタルニア人は外国人に対して、まず多数語 (major language) であるスペイン語でコミュニケーションをとろうとする。しかし、外国人——日本人——のほうから少数言語 (minor language) であるカタルニア語で話しかけたら、どのような反応を彼らが示すであろうか。田澤耕氏は著書「カタルーニャ50のC&Q」,(新潮選書)で、このような前提に立ち、その調査の結果を以下に4つのケースにまとめている。

- a) 当然のような顔をして、スペイン語で答えてくる。
- b) いやな顔をして、スペイン語で答えてくる。

c) 意外そうな顔をしながらも、カタルニア語で答えてくる。

d) 当然のようにカタルニア語で答えてくる³⁴⁾。

この地域で用いられているスペイン語は、いわゆる中部スペイン語 (castellano meridional) とよばれ、独特な発音形態を有している。したがってその検証には、先に述べた傍属理論を、言語の様々な面にあてはめて論をすすめる必要がある。例えば、バルセロナ大学で数年前に、授業がカタルニア語で行なわれることを望むかといった質問に対し、24%の学生が肯定したといわれるが³⁵⁾、果たしてこの数字は今日ではどのように変化しているであろうか。いわゆるカタルニア地方にみられる、今日のナショナリズムの高揚という点からすれば、数字上は当然このパーセントは上昇して然るべきである。しかしながら数年前とは異なり、バルセロナ大学の学生の出身地も様々になってきたはずである。移住者の問題を考慮に入れなければならない点、統計上の数字の扱いは、社会的要因を念頭において、あらゆる側面で慎重をきさざるを得ない。

4. 3 カタルニア地方で話されているスペインの特徴

①音声面

a) カタルニア語に [s] と [θ] の区別がないことから、この地域のスペイン語は “seseante” である³⁶⁾。しかしながら、この地域の seseo は南米やアンダルシアのものと異なり、無声前舌歯茎音 [s̺] で発音される³⁷⁾。

b) 側音 [l] の発音に、強い軟口蓋化現象をとまう：mal > [maɫ] ([a] は /a/ の軟口蓋音)

c) 二つの連続子音において同化現象 (assimilation) がみられる：atlas > [aɫ-las]

d) 後続する語が母音で始まる時、語尾の /s/ は有声化する：los árboles > [loz árboles]

e) バレアーレス (Balears) 地方において、/s/ の音の連続が無声後歯擦音 [ts] を生じさせる。さらにこの現象はマヨルカ方言 (mayorquín) にもみられる：a las siete > [a latsiete]

f) 語尾の /-d/ が /-t/ に近く発音される：verdad > [verdat], pared > [paret]

g) タラゴナ (Tarragona) からバレンシアにかけての地域では、有声唇歯摩擦音 [v] の発音が保持されている。

h) アクセントをもたない母音 /e/ は /i/ に近く発音される。

i) 母音 /a/ は、とりわけ語尾で硬口蓋化する。

②形態・統語面

a) 名詞の性に変換があるが、これはカタルニア語の名詞の性からの類推である：los dientes > las dientes

b) 一連の不規則動詞の活用が規則的に変化する：anduvieron > andaron, reduje > reduci

c) 所有代名詞の特別な用法：delante de ti > delante tuyo, cerca de nosotros > cerca nuestro

5 スペイン語とバスク語の関係

ポルトガル語やカタルニア語とは語源的にまったく異なるバスク語と、スペイン語の二重言語併用地帯の検証にあたっては、まず歴史言語学的考察から手がけなければならない。そこで我々は、castellanoの最初の文献として知られる「エミリアネンセの注解」(Glosas Emilianenses) が、同時にバスク語で書かれた最初の文献であったことを念頭におき、この二つの言語の関係を見ていくことにする。

まず、俗にバスク語が話される地域といっても、バスク語のみが話される非常に限られた地域をのぞき、ほとんどがバスク語とスペイン語の二重言語併用地帯、あるいはスペイン語のみが話されている地域を想定しているということである。大多数のバスク人はスペイン語を話す、これこそ〈本来のスペイン語〉という意味でのスペイン語である。というのは、バスク人の話すスペイン語は音韻的に極めて明瞭であり、この明瞭性こそが元来のバスク語とスペイン語の関係を示唆しているからである。言いかえるなら、スペイン語が他のロマンス諸語と比べて、多くの側面できわだった特質をあらわしているのは、その大部分がバスク語の基層に負っているということである。まず音声面からして、子音や母音の発音がロマンス諸語のうちで最も明瞭であるのがスペイン語であ

ることは一目瞭然であり、さらに語彙面や形態・統語面でも、スペイン語は様々な点でその独自性を有している。

スペイン人言語学者 Manuel Alvar は、とりわけナバラ (Navarra) 地方における言語事情に関して、この地域の二重言語併用の状況は、言語が形成された時代に歴史をさかのぼるものであると主張し、当時この一帯では、スペイン語とバスク語が混成したような一つの言語が話されていたと指摘している。すなわち当時は、純粋な形のバスク語が用いられていたのではなく、いわば、アラゴン方言や castellano がいっしょになったという意味での混成言語 (mixed language) としてのバスク語である。

5. 1 バスク語の起源と範囲

バスク語は、その領域を限定するための歴史的資料に乏しいが、この地域のローマ化の時代と今日で、バスク語の領域は同一である、という説にかなりの信憑性があると筆者は考える。それならば問題は、「バスク語はどの地域まで広がっていたか」ということに自ずと絞られてくる。言い換えれば、それはバスク語の起源という問題と深く拘わることになる。長い間、バスク語はイベロ人の言語に由来すると考えられてきたが、もしそのような前提に立つと、比較研究の立場からはイベリア半島全体が〈バスク〉ということになってしまう。それは例えば、スペイン南部のグラナダ (Granada) の古い地名 “Iliberris” もイベロ民族に起源をもっているからである。そこで、バスク語はイベロ人の諸言語とは関連がないとする説が次第に主流を占めるようになった。今日、バスク語の起源について最も有力なのは、これをコーカサスの言語と系統づけて考える説である。一連の研究者のなかには、旧ソビエト連邦のジョージア (Georgia) の言語との類似性を前面に押しだし、バスク語をコーカサス (caucasia) 言語の一つに数える者もいるほどである。

ともあれ、バスク語はイベリア半島がローマ化される以前には、今日以上に広い地域で話されていたということで多くの見解が一致し、中世において東はウエスカ (Huesca) 県からレリダ (Lérida) 県まで、南はリオハ (Rioja) の Logroño³⁸⁾、さらに西はビスカヤ (Vizcaya) 県のネルビオン川 (río Nervión) までの地域で

話されていたとされる。しかしながら、今日のバスク語の境界線が、学問上ははっきりとした形で設定されたのは19世紀に至ってのことである³⁹⁾。

a) 北部

北の境界線にはほとんど変化がなく、今日に至っているといつてよい。ピレネー山脈の麓のフランス国境内の Labourd, Soul, Bass-Navarre がその限界とされる。フランス語学上の立場からは、バスク語はむしろ単なる Patois⁴⁰⁾とみなされることもある。

b) 東部

フランス側の東の境界は上の3つの地点にそのまま一致する。またスペイン側では、Huesca 県と Navarra 県の県境が境界である。

c) 西部

中世当時の境界 Vizcaya 県の Nervión 川に一致するが、厳密にはこの川の西側ではバスク語は話されていない⁴¹⁾。

d) 南部

バスク語の領域を示すにあたり、この地域が最も複雑な問題を呈している。Brocaは最大領域 (Maximum limit) と最小領域 (Minimum limit) の二つを想定している⁴²⁾。

5. 2 バスク語使用地域の歴史的推移

19世紀以降、castellano の北部への拡大は顕著で、バスク語はめまぐるしく Navarra や Alava 方面へ押しやられていった。この地域は地形上入り組んだ山岳部であるため、言語地図の作成に多大な労苦を費やすことになる。そんな理由から、筆者は今日までの既成の幾つかの報告を取り上げることにする。まず、Julio Caro Baroja の『ラテン語とバスク語における比較研究資料』(*Materiales para un estudio de la lengua vasca en relación con la latina*), Salamanca, 1944は、castellano の語彙がどのような形でバスク語の語彙に影響を及ぼしたかを考察している。さらに José Maria Sanchez Carrión は『ナバラ県におけるバスク語の現状』(*El estudio actual del vascuence en la provincia de Navarra*), 1970, でバスク語の南の領域に関して詳細な境界線を設定している。

今日、Alava 県と Navarra 県におけるバスク語の使用地域が、よりはっきりとした形で示せるようになったのは、この二人の研究成果に負うところが大きい。

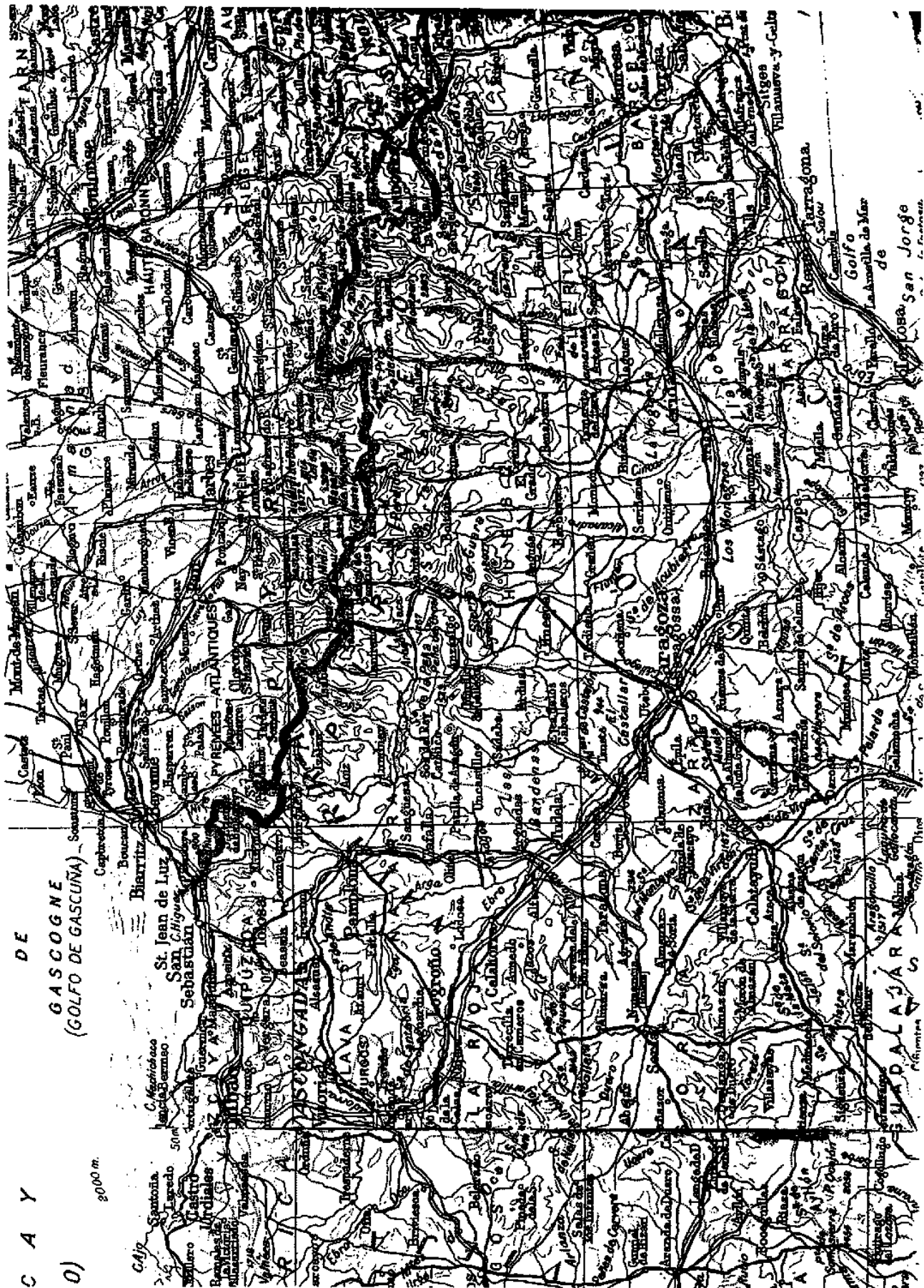
まず Alava 県の状況に関しては、18世紀末の資料が、当時バスク語が話されていた都市の具体的地名を引き合いにだしている。ビトリア (Vitoria) の司祭区域 (vicario) に属す Gamboa, Salvatierra, Orduña, Ayala などである。すなわち18世紀末には、Vitoria 平野の大部分でバスク語が話されていたとされる。しかしながら、今日ではバスク語の一方言⁴³⁾がオケンド谷 (Valle de Oquendo) の Villareal で話されているにすぎないと報告されている。このように、18世紀から現代に至るまでに、バスク語の使用地域はきわだって北上したことになる。

他方 Navarra 県に関しては、この地域を三つに細分化することで状況の整理が試みられた。一つは Ribera de Ebro, もう一つは中部地域、そして最後に北部一帯を設定している。まず Ribera de Ebro, この周辺ではバスク語の使用が確認されていない⁴⁴⁾。また、中部すなわち Ribera から山岳地帯に至る地域では、バスク語はパンプローナ (Pamplona) の南部まで使用されていたとされる。もちろんこの地域のバスク語はバスク語といっても一種の方言 (variedad del vasco⁴⁵⁾) であるが。これに対して北部の山岳地帯こそが、最も明確な形で今日でもバスク語が使用されている地域である。この地帯のバスク語もやはりバスク語の一方言で⁴⁶⁾、さらに北西部ではこれまたその細分化方言のギプスコア方言 (guipuzcoano) が話されているといった具合である。このように Navarra 県では、バスク語の多くの細分化方言が話されている現状を目の当たりにする訳で、ひとまずその分布状況を整理するのが当面の課題であろう。

a) ビスカヤ方言 (vizcaíno) の使用地域は非常に限られている。

b) ギプスコア方言 (guipuzcoano) や高地北部ナバラ方言 (alto navarro septentrional) は Guipúzcoa で話され、その地域はフランスとの国境の町イルン (Irún) にまで至っている。

c) フランス語の影響を受けたバスク語は低地東部ナバラ方言 (bajo navarro oriental) と呼ばれ、アエスコア溪谷 (Valle de Aezcoa) やサラサール溪谷 (Valle



地図 3

de Salazar) で主に話されている⁴⁷⁾。

d) Labortano は Labourd や Zugarramundi また Urdax で話され、ピレネー山脈中部のバスク語はすべてこの Labortano である。

e) Roncalés もバスク語の一方言で、ロンガル溪谷 (Valle de Roncal) で話されていたが、今日では消滅してしまった。

さらにバスク語を話す人々の割合に関して、統計上の数字を示した Pedro de Irizar の研究がある。“Los dialectos y variedades de la lengua vasca” ; *Boletín de la Real Sociedad Vascongada de amigos del País*, 1973

Irizar はこの論説で、バスク語の二重言語併用者の数を1970年の調査に基づき、以下のように報告している。Vizcaya (140229人), Guipúzcoa (276843人), Alava (1863人), Navarra (35228人), 他方フランス側のバスク人口に関しては内訳をはっきりせず、単に約7900人としている。これらの数字が物語るのは、バスク語人口250~300万人のうち、50万人がバスク語を話すという現状である。

5. 3 複合言語 (complex language) としてのバスク語：8 方言とその細分化方言

19世紀のボナパルト (Bonaparte) 公は、バスク語の方言には8通りあり、さらにそれぞれの細分化方言は23に至ると指摘した。しかしこの〈方言〉(dialect) という用語は歴史的見地からの定義で、方言間のコミュニケーションが常に可能であるとは限らないことも含意している。したがって、〈方言〉というよりは、もはや〈言語〉(language) と言い直すべきであるとの見解を述べる研究者もいる⁴⁸⁾。いずれにせよ、ボナパルトによる8つのバスク語方言の分類は以下のようになっている：

a) スペイン側：ビスカヤ方言 (Vizcaino), ギプスコア方言 (Guipzcoano), 高地北部ナバラ方言 (Alto navarro septentrional), 高地南部ナバラ方言 (Alto navarro meridional)

b) フランス側：低地南部ナバラ方言 (Bajo navarro meridional⁴⁹⁾), 低地北部ナバラ方言 (Bajo navarro septentrional⁵⁰⁾), スール方言 (Suletino), ラブール方言 (labortano)

これらのバスク語方言に対し、前出の Caro Baroja は8つの方言がそれぞれ細分化方言をもつことを指摘し、可能な限りそれぞれが使用される具体的地名を示した。

①ビスカヤ方言 (Vizcaíno)

- a) Oriental : Máquina で話される
- b) Occidental : Guernica 及び Bermeo で話される
- c) Guipúzcoa : Vergara 及び Salinas で話される

②ギプスコア方言 (Guipuzcoano)

- a) Guipuzcoano septentrional : Hernani 及び Tolosa で話される
- b) Guipuzcoano meridional : Segama で話される
- c) Guipuzcoano de Navarra : Burunda 及び Echari-Aranaz で話される

③高地南部ナバラ方言 (Alto navarro meridional)

- a) Cispamplonés
- b) Ilzarbe
- c) Ultrapamplonés

④高地北部ナバラ方言 (Alto navarro septentrional)

- a) Ulzama
- b) Bazgán
- c) Araquil
- d) Araiz
- e) Irún

⑤ラブール方言 (Labortano)

- a) Labortano propio : Labourd で話される
- b) Labortano híbrido : Sare で話される

⑥低地東部ナバラ方言 (Bajo navarro oriental)

国境を越えスペイン側のサラサル溪谷 (Valle de Salazar) で話され、別名 Salaceño ともよばれる。

⑦低地西部ナバラ方言 (Bajo navarro occidental)

アエスコア溪谷 (Valle de Aezcoa) で話される

⑧スール方言 (Suletano)

スール (Soul) で話される。

さらに Irizar は、それぞれの細分化方言を使用する人数を具体的な数字で明らかにしているが、——その統計上の数字が一桁まで記すあまりにも厳密なもので、筆者としてはその信憑性に不自然な感を免れないので、ここでは割愛する——いずれにせよ、最も使用人口の多いバスク語はギプスコア方言の約20万人であると指摘している。最後に、Sanchez Carrión が調査したナバラ地方のロンカル方言 (Roncalés) の消滅に関する彼の社会言語学的考察に触れておく。

《Roncalésはロンカル溪谷 (Valle de Roncal) で話されている。Roncalés の痕跡らしきものを70才を越えた二人の男性老人が話していた。ロンカル溪谷以外の地域では、80才を越える一人の老婆の言葉に、それらしき痕跡がみられた。またある村においては、Roncalés を話す唯一の人が死去したばかりである、という情報を得た》

この Sanchez Corrión の調査が発表されたのは1969～1970年であったことから、Irizar はその後、Roncalés がもはや死語となってしまったと結論づけたようである。

5. 4 今日のバスク語とその将来

20世紀の初頭になって、バスク語の擁護と研究を目的とする公的機関であるスペイン・バスクアカデミーが創立され、共通書き言葉としての統一バスク語⁵¹⁾が制定されるに至った。これは、最も重要なバスク語の方言——住民への普及度を基準として——を集積して、そこから言語的共通項を抽出するといった試みであった。当然の結果として、この統一バスク語にはギプスコア方言とビスカヤ方言の素性が数多く取り入れられている。このように新世代にバスク語を継承していこうとする運動は、かなり積極的な世論に支えられていたのであるが、いっぽうでは、学校制度のいきとどかない寒村などの若者の間には、この〈新バスク語〉にアイデンティティーを抱けない風潮があるのも現状である。

結語

ここまで本小論では、スペイン語を基準として、ポルトガル語、カタルニア語そしてバスク語との関係を、歴史言語学的、社会言語学的考察を通して、多少雑然と述べてきた感を筆者は免れないが、イベリア半島全体の言語事情を、いま一度基本的ポイントをおさえて概観するなら、それは以下のような項目に集約されよう。

- ①イベリア半島は単一言語使用 (monolingualism) 地帯と二重言語併用 (bilingualism) 地帯に分類できる。
- ②イベリア半島においてはその言語事情の複雑性から、*bilingualism* という用語に対して、むしろ *sesquilingualism* なる用語を適用すべきである。このことにより、さらに明確な言語地図 (linguistic atlas) の作成が可能となる。
- ③現代スペイン語は、従来はカスティーリャ地方の方言であったことから、スペイン人には——特に地方意識の強い人々は——スペイン語を『カスティーリャ語』と称する人も多い。
- ④スペイン人が、日本語の『スペイン語』という意味で、ある人は “español” をまたある人は “castellano” を用いるが、どちらを用いるかというそのイデオロギー的背景は様々である。
- ⑤イベリア半島におけるスペイン語とポルトガル語の分布状態は、その国境に必ずしも一致しない。特にポルトガル北部のガリシア地方との境界においては、その言語分布はさらに複雑である。というのは、この地域ではポルトガル語と、その方言にあたるガリシア方言 (galleto) が混在し、さらにスペイン語のレオン方言 (leonés) が介入しているからである。
- ⑥スペイン語とカタルニア語の境界線は、むしろ、スペイン語のアラゴン方言 (aragonés) とカタルニア語の境界と考えることができる。しかしながら、ピレネー地方におけるカタルニア語とアラゴン方言の境界は非常に漠然としている。これに対し、カタルニア地方から南部への海岸線では境界が明白になっている。
- ⑦イベリア半島におけるバスク語の考察にあたっては、ピレネー山脈を越えたフランス国境内の言語状況も研究の対象となる。フランス人には、バスク語を

俚言口話 (patois) とみなすむきもある。

⑧バスク地方の人々が話すスペイン語は、発音が明瞭であるといわれる。これはバスク語の音韻体系が、スペイン語以上に明瞭であることに由来する。イベリア半島では、バスク人のスペイン語の発音がその手本とされていることから、日本で採用されるスペイン語の外人教師にも、この地方の出身者が多いようである。

⑨スペイン語が他のロマンス言語に比べて独特な言語的様相を示すことに対し、従来から言われてきたアラビア語との歴史的結びつきと並行して、バスク語の影響も指摘すべきである。

注

- (1) ある話し言葉が、ある一定の地域で様々な要因によって他の言語にとって代わられたような場合、このような話し言葉は、もとの言語が後の言語に与えた影響という点から考察すれば、すべて〈基層言語〉と呼ばれる。例えば、ローマ征服以前に、スペインのソリア (Soria)、ブルゴス (Burgos)、ログローニョ (Logroño)、グワダラハラ (Guadalajara)、またテルエル (Teruel) やサラゴサ (Zaragoza) の西部及びナバラ (Navarra) の南部で話されていたケルト・イベリア語 (Celtiberian) の口語は、ロマンス語の基層言語である。このケルト・イベリア語の存在は、イベリア半島出土の貨幣や碑文、固有名詞によって知られる。その資料は、M. Lejeune ; *Celtiberia*, Acta Salamanticensia, 1955に収められている。
- (2) ある言語が他の言語の領域に大きく侵入しながらも、これを駆逐することなく、最終的にはいくつかの痕跡を残して消滅してしまうような場合、このような言語はすべて〈上層〉の名で呼ばれる。ゲルマン民族の大移動の後に、ガリア地方のゲルマン諸語は結局消滅したが、この地のロマンス語に対して多大な影響を及ぼした例がわかりやすい。さらにイベリア半島においても、711年のアラブ人の南スペイン侵入以来、アラビア語がスペイン語に及ぼした著しい影響——特に日常語における語彙面での痕跡 (arabism) ——は、この上層理論の立場から扱われるべきテーマである。
- (3) *Pragmatics* は近年、多くの研究者によって様々な定義がなされてきた。*Pragmatics* は言語活動——コミュニケーション活動——における話し手と聞き手の心理的動機づけ、対話者の対応、コミュニケーションの社会化された類型、その目的などにかかわる側面を扱うものである。したがって、統語論的側面——言語構成の形式的特性——や、意味論的側面——言語実体と世界との関係——からの従来のアプローチとは異なる。

- (4) 基層理論に関するものは、その他 Bertoldi (1931), Brøndal (1948), Boileau (1946), Pokorny (1936), Terracini (1938), Zirmunskij (1936) および Jespersen (1922) などがある。
- (5) アラウカ語は、南アメリカインディアン語の一つに数えられる。言語人口総数は約21万人で、チリのBío-Bío州、Maleco州、Cantín州に20万、アルゼンチンのNeuquén州では8000人が用いている。
- (6) しかしながら、Amado Alonsoはこの現象を基層言語とは無関係であると主張し、以下のような説明を試みている。
 - ① [r] の緊張性ふるえ音の弛緩化から弛緩性摩擦音への移行
 - ② 調音点の硬口蓋化 (palatalization)
 - ③ この硬口蓋摩擦音が前方の /t/ に同化 (assimilation)
 - ④ この発音はスペインのナバラ地方でもみられる故、決してアラウカ語の基層ではない。
- (7) この音が日本語の「ハ行」の「フ」と、調音点や調音法が一致している点は興味深い。
- (8) 言語学的に厳密な定義を施せば、前者は《二重言語兼用》(diglossia) とよばれ、《二重言語併用》とは一線を画する。例えば、同時に二つの言語で話すことを覚えた子供は、二重言語併用であるのに対し、第一言語を自分のものとしてから第二言語を覚えた子供の場合は、二重言語兼用者 (diglot) として区別さる。
- (9) ユカタン半島ではマヤ語 (Maya) を中心とするインディアン語が計300万人、またパラグアイではグワラニ語 (Guaraní) が100~150万人の間で話され、住民の半数が二重言語併用者であるといった状況にある。
- (10) ガリシア地方は1093年に、カスティーリャ王のアルホンソ6世によってカスティーリャに併合され、1096年、アンリ王がポルトガル伯に任命された。当時ポルトガルは、まだスペインの一部とみなされていたが、1143年独立を達成し、アンリはポルトガル王となった。その後、1580年から60年間、ポルトガルはカスティーリャのフィリップス2世によって、再び支配下に置かれる時期もあった。
- (11) しかしながら、地名はポルトガル語式に Alamedilha とせず、スペイン語式の綴り Alamedilla を用いている。
- (12) アストゥリアス方言は、起源的にはレオン方言のさらに古い方言の形態を留めているとされ、“Bable” という別名で呼ばれることもある。
- (13) Cua川側の谷ではガリシア方言が、またSil川側ではレオン方言が話されている。
- (14) 以後、「スペイン語化」という用語は、当時の歴史的背景をふまえて「カスティーリャ化」(Castellanization) の意味で使用する。現代スペインにおいても、いわゆる国語としての「スペイン語」に対して、“español” という言語名を用いるか、“castellano” とするか、多くの研究者の間でしばしば激しい議論の対象となることがある。

- (15) 本土の標準スペイン語では、二人称単数の主語人称代名詞の形態は“Tú”であるが、中米各地及び南米のアルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイでは、“Vos”で代用している現象
- (16) Rosalia de Castro はロマンチズムを代表するスペインの女流詩人でもあり、1863年『ガリシアの歌』を、80年には『若葉』をいずれもガリシア方言を一部に用いて出版した。バイリンガルであった彼女は、確かにガリシア方言を取り入れたのであるが、複雑な感情や深い心理描写などは、依然として castellano によっていたとされる。
- (17) イベリア半島で行なわれた seseo に関しては「イスラーム・スペインにおける言語事情」、東洋学術研究31巻2号、1992、や「イベリア半島を離れたユダヤ人社会と言語」、比較文化研究11巻、1993、で詳しくとりあげた。
- (18) 音韻の組み合わせ／-ny-／は、音素論上は castellano でも gallego でも硬口蓋鼻音〔ɲ〕にいきつくことは自然であるが、これを castellano 的特質であるといっばう的に判断し、／-ny-／をすべて歯茎鼻音〔n〕にしてしまったことから、次のような語彙が生まれた：
- montana < montaña, entrana < entraña
- 文学上のガリシア方言 (gallego literario) の創造に関しては、当時二つの方向性があったことを記しておく：
- a) castellano からポルトガル語からも隔たった独自の形態の gallego をつくりだす。
- b) 言語学上可能な規則に沿って、ポルトガル語に準じた gallego をつくりだす。
- (19) Archaism の定義は学説によって様々であるが、ある共時態において消失したり、あるいは消失しようとしている体系に属する語彙形態、または統語構造をこのように呼ぶのが一般的である。この時期の農村部といっても、言語共同体内には、社会グループによって、あるいは世代によって幾つもの言語体系が同時に存在する。特に、高齢の話し手だけが有する言葉の形態があり、若い話し手はこれらの形を共通の規範と比べて、archaism とみなすこともあり得よう。
- (20) Castropo の定義が《ガリシア方言化した castellano》(dialecto agallegado del castellano) であるのに対し、castellano 化した gallego は chapurrano と呼ばれている (dialecto castellanizado del gallego) この chapurrano の社会言語学的基盤はきわめて軟弱である。
- (21) ギリシア語で《統一言語》の意
- (22) この閉母音化はとりわけ語末で顕著であり、中南米や南スペインでも観察される現象であるが、本来は gallego を代表する特質である。さらに／e／>／i／の閉母音化はアストゥリアス地方やガリシア地方で支配的である。
- (23) この、大過去の用法に接続法過去の形態を代用する用法は、イベリア半島の他の地域で観察されることがある。これはガリシア出身の作家が各地にもたらした影響であると考えられる。

- (24) 他方、ガリシア語のみに知られる現象として〈連帯の与格〉(dativo de solidaridad) と呼ばれる用法がある。これは聞き手が動詞の表わす行為に直接関与していなくとも、聞き手に対応する代名詞の与格形が、動詞に虚辞的に添加されるもので、聞き手の注意をうながし、親密感を表現するための附加的手段であるといえる。

Non che teño nada=No te tengo nada.

- (25) Menendez Pidal, *La Frontera Catalano-Aragonesa*, Barcelona, 1944

- (26) ラテン語短母音 (vocales breves latinos) の二重母音化: $\acute{o} > ue$ 及び $\acute{e} > ie$

- (27) LUNA > lluna (カタルニア語), luna (アラゴン方言)

- (28) サラゴサ県の Fraga でカタルニア語の使用が確認されている。

- (29) Sanchis Guarnel による調査では、この地域のカタルニア語はむしろバレンシア方言 (valenciano) の一種で、古語体の素性 (archaic features) をとどめているとされている。

- (30) Manuel Alavar は Castellon 県の境界線について述べ、カタルニア語のバレンシア県沿岸部への介入を指摘している。

- (31) この南部アラゴン方言 (variedad del aragonés del sur) は、言語学上の分類では castellano の同類とみなされている。

- (32) 飛び地としての具体的な名をあげれば, Anna, Enguera, Navarrés などの村である。この一帯の擬古体の castellano の特徴は次のようなものである:

a) 語頭の /s-/ 及び語中で子音に連続する /-s-/ , また語中の /-ss-/ は無声摩擦音 (voiceless fricative) で発音される: señor, pensar, passar

b) その他の語中の /-s-/ は有声摩擦音 (voiced fricative) で発音される: rosa, oso, casa

この時代のスペイン語擬古体がイベリア半島の外で、今日でもセファルデー系ユダヤ人によって用いられている事実、またその理由に関して、筆者は既に、「イベリア半島を離れたユダヤ人社会と言語」, 比較文化研究第11巻, 1994年3月で述べた。

- (33) Juan Boscán Almogáber (~1542), バルセロナ生まれの宮廷人で、イタリア詩形で本格的なスペイン語の詩を書いた。また親友、ガルシラソ (Garcilaso de la Vega) の勧めで、イタリア人、カスティリオーネ (Baldassare Castiglione) の『廷臣論』をスペイン語に翻訳した。Boscánの最大の業績は、スペイン詩や思想に、イタリア・ルネッサンスの新しい息吹を伝えたことであるとされる。

- (34) カタルニア人たちがとったこの4通りの態度に関して、氏は次のような社会言語学的分析を試みている。

a) カタルニア語などという少数言語を話すことのできるのは、自分たちカタルニア生まれでカタルニア育ちの者に限られているはずだ。外部の者、特に外国人がカタルニア語を話すなどとは考えてもいないので、自動的にスペイン語が出てきてしまう。つまり、《外部の者=スペイン語》という固定観念が支配していて、その極端

な例として、家畜に命令するときはどうしてもスペイン語になってしまうというカタルニア農民のケースが報告されている。

- b) おそらく、他の地方から出稼ぎ、移住で来ている人間である。普段、カタルニア語でこきつかわれている上に、外国人（特に容貌が著しく異なる日本人）がやって来て、そのカタルニア語で話しかければ憤りの念を禁じ得ない。
 - c) 外部、特に外国人がカタルニア語を話すことを期待していない点では a) の人物と同じようなケースであるが、自分の言語や文化によそ者が関心を持ってくれているという喜びが、驚きの気持ちをおさえて好感へとつながった例
 - d) これは比較的稀な例で、カタルニア語の本だけを売る本屋、カタルニア州政府の機関、カタルニア言語アカデミー等々、カタルニア語だけが日常使われているところで仕事をしている人々に、時々このようなケースがみられる。
- (35) スペイン国立グラナダ大学スペイン語方言学者 Francisco Salvador 氏の報告による。
- (36) この *seseo* の傾向は、都市部ではみられず、いわゆる下層階級、農村部の二重言語併用者の間で顕著であるとされている。
- (37) これに対し、アンダルシア地方の /s/ は、無声前舌背歯音 (predorsal-dental, convex) の [s̺] である。
- (38) この Logroño 一帯は、バスク語が中世に拡大した最南端の境界である。
- (39) Luis Luciano Bonaparte とフランス人解剖学者 Broca は、バスク語の範囲に関する自説をそれぞれ展開したが、その報告はほぼ同じような結果となっている。
- (40) *Patois* (俚語) は広義にはある種の音声的事象、あるいは社会規則だけに特徴を示す社会方言で、ある限られた地域、それも一般に田舎の特定の共同体だけに用いられる時には「俚語口話」、「局地口話」とも呼ばれる。フランスの場合、局地口話を利用する話し手はほとんどの場合二重言語併用者で、公用言語が学校で教えられていることから、方言という用語より *patois* という用語が好んで用いられる。
- (41) 具体的には Santurce や Sestao などであるが、今日ではバスク民族運動の高揚から、この地域でも次第にバスク語が話されるような傾向がある。
- (42) *Maximum limit* とはバスク語が話されているにもかかわらず、castellano が優勢である地域、いっぽう *Minimum limit* とはバスク語が castellano より優勢な地域を示す。いずれも二重言語併用の度合いからの基準である。
- (43) ビスカヤ方言の一種 (variedad de vizcaíno)
- (44) この一帯は元来ロマンス語使用地域で、ここでナバロ・アラゴン方言 (navarro-aragonés) の初期の形が誕生したとされている。
- (45) このバスク語方言は厳密には〈高地南部ナバラ方言〉 (Alto navarro meridional) とよばれていたが、今日では消滅している。
- (46) このバスク語方言も厳密には〈高地北部ナバラ方言〉 (Alto navarro septentrional) と呼ばれる。

- (47) この方言は別名サラセニョ方言 (Salaceño) と呼ばれる。またフランス語ではこの方言を単に *Basse Navarre* と称している。
- (48) すなわち、8つの方言ではなく、8つの言語としてバスク語の方言がとり扱われるべきだとする主張
- (49) Bajo navarro meridional *oriental* とよばれることもある。
- (50) Bajo navarro septentrional *occidental* とよばれることもある。
- (51) バスク語で *Euskara Bauta* とよばれる。

参考文献

——スペイン語学全般・言語理論

- Borrego Nieto, Julio. 1981. *Sociolingüística rural. Investigación en Villadepera de Sayago*, Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca.
- Butrón, Gloria. 1989. 《Aspectos sociolingüísticos de la disponibilidad léxica》, *Asomante* (en prensa).
- Cedergren, Henrietta J. 1983. 《Sociolingüística》. En H. López Morales, ed. 1983, 147-165.
- 1987. 《Consideraciones sociolingüísticas sobre la micro evolución lingüística》. En H. López Morales y M. Vaquero, eds. 1987, 47-58.
- Coseriu, Eugenio. 1981. 《Los conceptos de “dialecto”, “nivel” y “estilo” de lengua y el sentido propio de la dialectología》, *Lingüística Española Actual* 3 : 1-32.
- Dorian, N. C. 1982. 《Language loss and maintenance in language contact situations》, in *The loss of language skills*, ed. by R. D. Lambert y B. F. Freed, New York: Rowley.
- ENTWISTLE, W. J., 1936. *The Spanish Language. Together with Portuguese, Catalan and Basque*, London.
- Etxetarría, Maitena. 1985. *Sociolingüística urbana. El habla de Bilbao*, Salamanca: Universidad de Salamanca.
- Guy, Gregory R. 1988. 《Language and social class》. In F. Newmeyer, ed. 1988, 37-63.
- Hudson, Richard A. 1980. *Sociolinguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Klein, Flora. 1979. 《Factores sociales en algunas diferencias lingüísticas en Castilla la Vieja》, *Papers: Revista de Sociología* 11 : 45-64.
- Mackey, W. 1976. *Bilinguisme et contact des langues*, Paris: Klincksieck.
- Martínez Martín, Francisco Miguel. 1983. *Fonética y sociolingüística en la ciudad de Burgos*, Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- MENÉNDEZ PIDAL, RAMÓN, 1964. *Orígenes del español. Estado lingüístico de la*

- Península Ibérica hasta el siglo XI*, Madrid, Espasa-Calpe, 5.ª edic.
- Montes, José Joaquín. 1986. «Dialectología y Sociolingüística: algunas ideas sobre sus interrelaciones», *Lingüística Española Actual* 8: 133-141.
- 1988. «La definición de dialecto», *Lexis*, 10: 55-59.
- Mougeon, R., E. Beniak y D. Valois. 1985. «A sociolinguistic study of language contact, shift and change», *Linguistics* 23: 455.
- Paradis, Michel, ed. 1978. *Aspects of bilingualism*, Columbia [SC]: Hornbeam Press, Inc.
- Poplack, Shana. 1983. «Lenguas en contacto». En H. López Morales, ed. 1983, 183-207.
- Rodríguez, Gustavo. 1983. «Algunas precisiones sobre el concepto de *dialecto*», *Lexis* 7: 239-264.
- Sala, Marius. 1988. *El problema de lenguas en contacto*, México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- ポルトガル・ガリシア方言, レオン方言
- ALONSO, DÁMASO, 1946. *El saúco entre Galicia y Asturias. (Nombre y superstición)*, en RDTradPop, II, págs. 3-32.
- 1958. *Notas gallego-asturianas de los tres Oscos*, en *Archivum*, VIII, págs. 5-12.
- ALONSO GARROTE, SANTIAGO, 1947. *El dialecto vulgar leonés hablado en Maragatería y tierra de Astorga. (Notas gramaticales y Vocabulario)*, Astorga, 1909; 2.ª edic., Madrid.
- ANDRES CASTELLANOS, M. 1957. (y otros), *Límites de palatales en el alto León*, en TDRL, I, Madrid, págs. 22 y ss.
- CATALAN, DIEGO, 1955. *The romanic Leonese domain*, en *Orbis*, IV, págs. 169-173.
- FARISH, R. M., 1957. *Notas lingüísticas sobre el habla de la Ribera del Orbigo*, en TDRL, I, Madrid, págs. 41 y ss.
- HERCULANO DE CARVALHO, JOSE, *Por qué se falam dialectos leoneses em terras de Miranda?*, en RPF, V, 1952, págs. 265-280.
- , *Fonologia mirandesa*, Coimbra, 1958.
- LEITE DE VASCONCELLOS, J., 1900-1911. *Estudos de Philologia mirandesa*, Lisboa.
- 1930. *Linguagem portuguesa de Alamedilla o Almedilha en Homenaje a Adolfo Bonilla y San Martín*, II, págs. 627-631.
- 1929. *Breve estudo dos falares de Riadonor e Guadramil*, en *Opúsculos*, IV, Coimbra.
- LLORENTE MALDONADO DE GUEVARA, A., 1947. *Estudio sobre el habla de La Ribera (Comarca salmantina ribereña del Duero)*, Salamanca.

RODRÍGUEZ CASTELLANO, LORENZO 1948. *Palatalización de la l- inicial en zona de habla gallega*, en BIDEA,

STAAFF, ERIK 1907. *Etude sur l'ancien dialecte léonais d'après des chartes du XIIIe siècle*, Uppsala,

——アラゴン方言, カタルニア語

ALVAR LOPEZ, MANUEL, 1955. *Catalán y aragonés en las regiones fronterizas*, en VII CILR, Barcelona.

ARNAL CAVERO, PEDRO, 1944. *Vocabulario del altoaragonés (De Alquézar y pueblos próximos)*, Madrid,

ELCOCK, W. D. 1950. *The evolution of -ll- in the aragonese dialect*, en Primer Congreso Internacional de Pireneístas, Zaragoza.

FERRAZ Y CASTAN, VICENTE, 1934. *Vocabulario del dialecto que se habla en la Alta Ribagorza*, Madrid,

GARCÍA DE DIEGO, V., 1919. *Caracteres fundamentales del dialecto aragonés*, Zaragoza.

Gimeno, Francisco. 1983. 《Hacia una sociolingüística histórica》, *Estudios de Lingüística de la Universidad de Alicante* 1 : 181-226.

Gómez Molina, José Ramón. 1986. *Estudio sociolingüístico de la comunidad de habla de Sagunto (Valencia)*, Valencia: Institució Alfons el Magnànim.

GRIERA Y GAJA, ANTONIO, 1914. *La frontera catalano-aragonesa*, Barcelona.

MENENDEZ PIDAL, RAMON, *Sobre los límites del valenciano*, en Primer Congreso Internacional de la Llengua Catalana, páginas 340-344.

POTTIER, BERNARD, 1946. *Etude lexicologique sur les Inventaires aragonais*, en VRo, X.

RUBIO GARCIA, LUIS, 1955. *Estudio histórico-lingüístico del antiguo condado de Ribagorza*, Lérida.

SAROÏHANDY, J., 1906. *Les limites du valencien*, en BHi, VII, págs. 297-303.

Vallverdú, Francisco. 1980. *Aproximació crítica a la sociolingüística catalana. Balanc dels estudis de sociologia lingüística als països catalans*, Barcelona: Edicions 62.

——バスク語

Luis Michelena, 1974. *El elemento latino-románico en la lengua vasca*. FLV 17, pp. 183-209.

—— 1977. *Fonética histórica vasca*. San Sebastián (Diputación de Guipúzcoa) 596 pp.

René Lafon 1952. *Etudes basques et caucasiques*. (Acta Salmaticensia, Filosofía y

Letras 5/2) Salamanca 88 pp.

——アンダルシア方言

ALONSO, AMADO, 1951. *Historia del ceceo y seseo español*, en *Thesaurus*, BICC, VII, págs. 111-200.

LLORENTE MALDONADO, ANTONIO, 1962. *Fonética y fonología andaluzas*, en RFE, XLV, págs. 227-240.

(文学部外国語学科助教授 セム・ハム比較言語学)